

菜の花と小娘他

志賀直也

志賀直哉文庫 1

中央公論社

采の花と小娘

他

昭和二十九年六月三十日 發行



菜の花と小娘 他

定價 一五〇圓

著者 志賀直哉

發行者 栗本和夫

印刷者 長久保慶一

發行所 中央公論社

東京都千代田區丸ノ内二ノ二
丸ノ内ビルディング五九二區

電話和田倉一一二番

振替口座東京三四番

亂丁・落丁本は本社又はお買求めの書店
でお取替へいたします

印刷・刷印日本印刷株式會社

志賀直哉文庫 1

中央公論社

采の花と小娘

他

口 裝
繪 幀
石 原
井 弘
鶴 三

菜の花と小娘



目次

菜の花と小娘	七
或る朝	一五
網走まで	二三
速夫の妹	三七
剃刀	七一
濁つた頭	八五
荒絹	一三
母の死と新しい母	一四
鵠沼行	一五

正義派……………一六九

出來事……………一八一

○清兵衛と瓢箪……………一九一

范の犯罪……………一九七

寓居……………二二七

○大津順吉……………三三七

解説……………阿川弘之……………三〇五

菜の花と小娘

或る晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾つて居ました。

やがて、夕日が新緑の薄い木の葉を透かして赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、其處で自分の背負つて來た荒い目籠めかに詰め始めました。

不圖、小娘は誰かに自分が呼ばれたやうな氣がしました。

「ええ？」小娘は思はずさう云つて、起つて其邊を見廻しましたが、其處には誰の姿も見えませんでした。

「私を呼ぶのは誰？」小娘はもう一度大きい聲でかう云つて見ましたが、矢張り答へる者はありませんでした。

小娘は二三度そんな氣がして、初めて氣がつくと、それは雜草の中から只一ト本もと、僅に首を差し出して居る小さい菜の花でした。

小娘は頭に被つて居た手拭で、顔の汗を拭きながら、

「お前、こんな所で、よく淋しくないのね」と云ひました。

「淋しいわ」と菜の花は親しげに答へました。

「そんなら何故來たのさ」小娘は叱りでもするやうな調子で云ひました。菜の花は、

「雲雀の胸毛むぎげに着いて來た種が此處で零れたのよ。困るわ」と悲しげに答へました。そして、どうか私をお仲間の多い麓の村へ連れて行つて下さいと頼みました。

小娘は可哀相に思ひました。小娘は菜の花の願ひを叶へてやらうと考へました。そして靜かにそれを根から抜いてやりました。そしてそれを手に持つて、山路やまみちを村の方へと下つて行きました。

路に添うて清い小さな流れが、水音をたてて流れて居ました。暫くすると、

「あなたの手は随分ほてるのね」と菜の花は云ひました。「あつい手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ、眞直ぐにして居られなくなるわ」と云つて、うなだれた首を小娘の歩調に合せ、力なく振つて居ました。

小娘は一寸當惑しました。

然し小娘には圖らず、いい考が浮びました。小娘は身輕く路端みちばたに蹲しゃがんで、黙つて菜の花の根を流れへ浸してやりました。

「まあ！」菜の花は生き返つたやうな元氣な聲を出して小娘を見上げました。すると、小娘は宣告するやうに、

「此儘流れて行くのよ」と云ひました。

菜の花は不安さうに首を振りました。そして、

「先に流れて了ふと恐いわ」と云ひました。

「心配しなくてもいいのよ」さう云ひながら、早くも小娘は流れの表面で、持つて居た菜の花を離

して了ひました。菜の花は、

「恐いわ、恐いわ」と流れの水にさらはれながら、見る／＼小娘から遠くなるのを恐ろしきうに叫びました。が、小娘は黙つて兩手を後へ廻し、背で跳る目籠をおさへながら、駈けて來ます。

菜の花は安心しました。そして、さも嬉しさうに水面から小娘を見上げて、何かと話しかけるのでした。

何處からともなく氣輕な黄蝶が飛んで來ました。そして、うるさく菜の花の上をついて飛んで來ました。菜の花はそれをも大變嬉しがりました。然し黄蝶は性急で、移り氣でしたから、何時か又何處かへ飛んで行つて了ひました。

菜の花は小娘の鼻の頭にポツ／＼と玉のやうな汗が浮び出して居るのに氣がつかしました。

「今度はあなたが苦しいわ」と菜の花は心配さうに云ひました。が、小娘は却つて不愛想に、

「心配しなくてもいいのよ」と答へました。

菜の花は、叱られたのかと思つて、黙つて了ひました。

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流れに波打つて居る髪の毛のやうな水草に根をからまれて、さも苦し氣に首を振つて居ました。

「まあ、少しさうしてお休み」小娘は息をはずませながら、さう云つて傍の石に腰を下しました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、氣持が悪いわ」菜の花は尚しきりにイヤ／＼をして居ました。

「それで、いいのよ」小娘は云ひました。

「いやなの。休むのはいいけど、かうして居るのは氣持が悪いの。どうか一寸あげて下さい。どうか」と菜の花は頼みましたが、小娘は、

「いいのよ」と笑つて取り合ひません。

が、其内水の勢で菜の花の根は自然に水草から、すり抜けて行きました。そして不意に、

「流れるう！」と大きな聲をして菜の花は又流されて行きました。小娘も急いで立ち上ると、それを追つて駆け出しました。

少し來た所で、

「矢張りあなたが苦しいわ」と菜の花はコハ／＼云ひました。

「何でもないのよ」と小娘も優しく答へて、さうして、菜の花に氣を揉ませまいと、わざと菜の花より二三間先を駈けて行く事にしました。

麓の村が見えて來ました。小娘は、

「もう直ぐよ」と聲を掛けました。

「さう」と、後で菜の花が答へました。

暫く話は絶えました。只流れの音に混つて、パタ／＼、パタ／＼、と小娘の草履で走るあしざと聲音が聴えて居ました。

チャポーンと云ふ水音が小娘の足元でしました。菜の花は死にさうな悲鳴をあげました。小娘は

驚いて立ち止まりました。見ると菜の花は、花も葉も色が褪めたやうになつて、

「早く〜」と延び上つて居ます。小娘は急いで引き上げてやりました。

「どうしたのよ」小娘はその胸に菜の花を抱くやうにして、後の流れを見廻しました。

「あなたの足元から何か飛び込んだの」と菜の花は動悸がするので、言葉を切りました。

「いぼ蛙なのよ。一度もぐつて不意に私の顔の前に浮び上つたのよ。口の尖つた意地の悪さうな、あの河童のやうな顔に、もう少しで、私は頬つぺたをぶつける所でしたわ」と云ひました。

小娘は大きな聲をして笑ひました。

「笑ひ事ぢやあ、ないわ」と菜の花はうらめしさうに云ひました。「でも、私が思はず大きな聲をしたら、今度は蛙の方で吃驚して、あわててもぐつて了りましたわ」かう云つて菜の花も笑ひました。

間もなく村へ着きました。

小娘は早速自分の家の菜畑と一緒にそれを植ゑてやりました。

其處は山の雑草の中とは異つて土がよく肥えて居りました。

菜の花はどんく〜延び育ちました。

さうして、今は多勢の仲間と仲よく、仕合せに暮す身となりました。

(明治三十七年作)

